

行程表

令和4年4月24日 (日)

石狩市内 → 新千歳空港発 (JAL 504) → 羽田空港出発 (JAL 609) → 長崎空港到着
(7:30) 車 (9:55) 飛行機① (11:35) (12:30) 飛行機② (14:25)

長崎空港出発 → 長崎駅 → 宿泊先③
(15:10) 高速バス (15:50) 徒歩2分 (ホテルクオレ長崎)

令和4年4月25日 (月)

宿泊先出発 → 原爆資料館 → 長崎港 → 福江港 → 視察① → 宿泊先⑤
(9:00) ハイヤー (9:10) (11:00) ハイヤー (11:30) ジェットフォイル④ (12:55) ジャンボタクシー 詳細別紙 ジャンボタクシー 樺ホテル

令和4年4月26日 (火)

宿泊先出発 → 視察② → 福江空港 (ANA 4696) → 福岡空港 (JAL 3515) →
(8:50) ジャンボタクシー ジャンボタクシー (12:00) (12:45) 飛行機⑥ (13:25) (14:25) 飛行機⑦

→ 新千歳空港到着 → 石狩市内解散
(16:40) 車

行程表 (案)

2022	所 属 石狩市議会 石政会 様	職・氏名	用 務 五島市海洋エネルギー視察	所 属 五島市海洋エネルギーセンター	職・氏名 理事 又野 博		
4月25日	11:30 長崎港	JF	1:25 長崎発JF船利 用	14:30 14:40 岡山沖	海上タクシ-		
	12:55 13:00 福江港			14:10 14:10 丸木棧橋			
	13:05 13:20 福江港			13:25 14:00 福江港 2階会議室「ふ くえ漁協 龍川 理事との意見交 換」		14:30 14:40 浮体式海上風力 発電	
	15:15 15:30 市内大津 はちまき道筋「展 望台より浮体ヤ ード視察」			16:00 16:30 岡山 陸上アワビ養殖 場見学		0:10	0:20
	15:40 15:50 岡山 海底ケーブリング 掘削地点			16:45 17:50 市内 榑ホテル着・発		0:15	0:10
	0:20			0:05		0:10	0:10
	0:05			0:15		0:30	0:10
	0:05			0:15		0:35	0:10
	0:05			0:15		0:35	0:10
	0:05			0:15		0:35	0:10
	0:05			0:15		0:35	0:10
	4月26日			8:50 市内		JF	0:10
9:00 9:20 市内 海洋エネルギー 漁業共生セン ター		11:00 11:50 市内 海洋エネルギー 漁業共生セン ター					
9:45 10:00 岐宿町 半潜水型スバッ ド台船		10:25 10:35 岐宿町 水素燃料電池船					
15:15 15:30 市内大津 はちまき道筋「展 望台より浮体ヤ ード視察」		16:00 16:30 岡山 陸上アワビ養殖 場見学	0:25	0:25			
15:40 15:50 岡山 海底ケーブリング 掘削地点		16:45 17:50 市内 榑ホテル着・発	0:15	0:10			
0:10		0:05	0:10	0:10			
0:15		0:30	0:30	0:10			
0:15		0:35	0:35	0:10			
0:15		0:35	0:35	0:10			
0:15		0:35	0:35	0:10			
0:15		0:35	0:35	0:10			
4月26日		8:50 市内	JF	0:10	12:00 12:45 空港 ANA4696便 12:45発 13:25福岡着		
	9:00 9:20 市内 海洋エネルギー 漁業共生セン ター	11:00 11:50 市内 海洋エネルギー 漁業共生セン ター					
	9:45 10:00 岐宿町 半潜水型スバッ ド台船	10:25 10:35 岐宿町 水素燃料電池船					
	15:15 15:30 市内大津 はちまき道筋「展 望台より浮体ヤ ード視察」	16:00 16:30 岡山 陸上アワビ養殖 場見学			0:25	0:25	
	15:40 15:50 岡山 海底ケーブリング 掘削地点	16:45 17:50 市内 榑ホテル着・発			0:15	0:10	
	0:10	0:05			0:10	0:10	
	0:15	0:30			0:30	0:10	
	0:15	0:35			0:35	0:10	
	0:15	0:35			0:35	0:10	
	0:15	0:35			0:35	0:10	
	0:15	0:35			0:35	0:10	

■「長崎原爆資料館」などの視察について

1939年（昭和14年）「第二次世界大戦」（太平洋戦争）が始まり、1940年（昭和15年）、日本はドイツ、イタリアと軍事同盟を結びました。1942年（昭和17年）、米国は「マンハッタン計画」という原爆製造計画を極秘のうちに立ち上げました。ドイツへの投下を想定して開発されましたが、1944年（昭和19年）9月、米国と英国の会談で原爆は日本に対して使用することになりました。

1945年（昭和20年）4月に原爆投下目標の都市を検討する会議で日本の17都市が選ばれていました。いずれも軍の基地があったり、軍需工場がある都市です。イタリアは1943年（昭和18年）9月に降伏し、ドイツも1945年（昭和20年）5月に降伏してヨーロッパ戦争は終わりました。

1945年（昭和20年）7月23日に広島、小倉、新潟が目標となり、翌日、長崎が追加されました。7月25日、米国・英国・ソ連の代表がドイツのポツダムで話し合い日本の無条件降伏を求めた「ポツダム宣言」を出しましたが、日本は受け入れませんでした。

（受け入れていれば、おそらく原爆投下はなかったと思うと残念でなりません）

8月2日に出された命令で1945年（昭和20年）8月6日午前8時15分広島に原爆が投下されました。2日後の8月8日、2発目の原爆を8月9日小倉に投下する命令が出されました。原爆は必ず目標を目で確認してから投下することが命令されていました。到着した小倉上空は雲に覆われていたため投下目標を見つけることができず、第2目標の長崎に向かいました。長崎でも投下目標地点は雲に覆われていて確認できず、約3km北西に離れた上空で雲の切れ間を見つけ、午前11時2分原爆を投下しました。長崎市の当時の人口約24万人のうち約15万人の死傷者がでました。8月15日、日本はやっと「ポツダム宣言」を受け入れて無条件降伏し戦争は終わりました。

「国立広島原爆死没者追悼平和祈念館」の追悼空間では、原爆死没者の方々を追悼するとともに永遠の平和を願います。原爆死没者名簿を納めた名簿棚の250m先が原爆落下中心地です。名簿棚には長崎原爆死没者名簿190冊（185,982人、2020年（令和2年）8月現在）が奉安されています。

（全員で追悼してきました）

「平和祈念像」は、戦争で亡くなった方々の霊魂を慰めるとともに、世界平和への思いを象徴する像です。高さ9.7mの大きな男性像の天を指す右手は原爆の恐さを、水平に伸ばした左手は平和を、軽く閉じた目は犠牲者の冥福を祈っています。

（広島象徴原爆ドームのリアルさと比べると対照的に感じました）

■浮体式洋上風力発電所について

①説明（五島くえ漁協理事 熊川長吉氏）

長崎県五島市栴島周辺海域にて、平成 22 年から始まった環境省の浮体式洋上風力発電実証事業（戸田建設等）は世界初のハイブリッドスパー型（浮体部の下部をコンクリート、上部を鋼で構成した浮体形式で、中空となった下部スパー内部に約 1,400t のバラストを投入して、バランスを保つ 2,000kw の発電施設である。一般に水深が 50m くらいまでは「着床式」だが、それ以上深くなると安定性とコストに課題があるため「浮体式」の出番となる。

日本の海域は「浮体式」の立地に適しており、「着床式」よりもポテンシャルが高いとされる。

さて平成 24 年に 100kw の小規模試験機が設置されることが決まると、漁場が悪くなると漁業者等が全員反対を始めた。これを見た市議会議長も歴任した漁協組合長の熊川氏は当時「磯焼け」も始まっており、このままでは漁業の将来はだんだん先細りになると考え、事業者（戸田建設）・行政・漁業者の間に立ち、事業者だけが儲かるのではなく、漁業者も儲かる風力発電事業にかけてみようと言説得を始めた。そこに全国的に「磯焼け」回復を推進してきたプロダイバーの渋谷正信氏も加わり、平成 25 年に 2,000kw の実証機が設置されたところ、半年後くらいから早くも、3本の係留チェーンに藻が生え始め魚が集まり出した。実証事業の最終年である平成 27 年には漁獲量も上向くようになり、漁業者等も「これは良いものだ」と理解するようになってきた。

実証機を崎山沖へ移動するときには、地元の漁業者等は持って行かないで欲しいと言うまでに洋上風力発電所と共存共栄するようになっていた。戸田建設が売電の 1%を漁協に払い 2,000 万円の基金を創設することになり、浮体式は船扱いになるため毎年 30 万円の固定資産税が入る五島市も基金に 1,000 万円を提供した。

令和 4～5 年度で更に 8 基の洋上風力発電所を建てる工事が既に始まっており、渋谷氏の指導で高さ 30m のマンション型の鉄骨の人工漁礁を 8 基の間に置き、魚のアパート・海洋牧場を作ろうと夢見ている。つまり漁業・地域と共存共栄した洋上風力発電づくりである。

②現地視察（以降、五島列島観光コンベンションビューロー 又野理事）

海上タクシー乗船にて、崎山沖の浮体式発電所を視察

③海底ケーブル陸揚げ地点視察

浮体式洋上風力発電所まで約 5 km

④半潜水型スパッド台船視察

スパ型は喫水が 70m 以上あるため岩壁では艀装できず（座礁する）、半潜水型スパッド台船に積み込み半潜水状態で浮体を浮上させる。

⑤海洋エネルギー漁業共生センター視察

「磯焼け」回復に取り組んでいる渋谷氏から「その海域に即した形状・素材・配置で人工構造物を設置すれば、構造物に藻が生え、生き物が集まる。デザイン次第で海上開発と生態系の再生を同時に達成することが可能」との話を伺う。

（石狩湾では今まで、洋上風力の漁業に対する悪影響ばかりが言われてきたが、今回の研修で洋上風力と漁業の共存共栄の実践は目からウロコであった。今後研修の成果を提案していきたい）

行政視察報告書

視察日時 令和4年11月6日(日) 16:00～

視察場所 沖縄県恩納村文化情報センター

視 察 者 石政会7名(議長含む)

伊藤 一治、加藤 泰博、高田 静夫、日下部 勝義、山田 敏人、
佐藤 俊浩、花田 和彦

視察内容

恩納村に関するあらゆる情報を収集し、村内外へ発信する施設を目指し、平成27年4月に開館しており、コロナ前は毎年約8万人の入館者があった。図書館だけでなく、観光情報も提供する複合施設として整備したことが高い利用実績につながっていると思われる。

センターの2階が図書館機能としてのフロアで一般閲覧室からは国定公園に指定されている海岸沿いの海を眺めながら読書を楽しめる。現在10万冊を超える蔵書を所有している。1階は観光情報フロアとなっており、恩納村をはじめ沖縄北部(やんばる)の観光や地域の情報収集に役立つ情報を提供している。3階は展望室になっていて伊江島(沖縄戦で住民は恩納村に逃げてきた)が見える絶景スポットになっていた。

恩納村文化情報センターは、博物館に隣接して建てられている。博物館は、村及び沖縄の歴史・文化を知るうえで重要な役割を果たす社会教育施設で、そこに図書館を設置することで、類似した目的を持った社会教育施設として連携し、住民等により濃密なサービス展開を図っていた。

教育・文化・観光を組み合わせた相乗効果は今後の社会教育事業のあるべき方向を示しているように感じた。

行政視察報告書

視察日時 令和4年11月7日(月) 10:40～
視察場所 沖縄県恩納村立うんな中学校(令和2年4月開校)
視察者 石政会7名(議長含む)
伊藤 一治、加藤 泰博、高田 静夫、日下部 勝義、山田 敏人、
佐藤 俊浩、花田 和彦
説明者 恩納村教育委員会 當瀬欽也教育長
恩納村立うんな中学校 具志堅博昭校長

視察内容

この度の視察につきましては、いじめ、不登校「ゼロ」に向けての取組についてであります。

いじめ見逃し「ゼロ」に向けての取組について

学校は、全校集会において校長が日常的にいじめの問題に触れ「いじめを許さない」風土を学校全体で醸成する。集会時に全児童・生徒が一斉に「いじめの定義」を確認することで、いじめに対する認識の差を生まないように努める。また「i-check」結果から見える課題に対して組織で対応するなど、いじめと認知された事案は、全て緊急連絡第一報として教育委員会へ確実に報告する。

いじめか否かの判断は、法令に基づき策定した基本方針に沿って、いじめ防止対策委員会で行うことや弁護士会による「いじめ防止授業」等、外部有識者の活用でその結果として令和3年度でいじめ認知件数が小学校で6件のところ令和4年度は9月末現在で2件にとどまっている。また、中学校では令和3年度で1件が、令和4年度では2件と恩納村教育委員会の取組が成果を上げているのではないかと感じています。

次に不登校「ゼロ」に向けた取組では、当該児童生徒に関する情報収集とその整理を早朝に行う。村雇用SSW(スクールソーシャルワーカー)が個別のケースに日常的に関わり助言や必要に応じて家庭訪問に同行するなど登校支援に重要な役割を果たしている。また、指導支援を確実に記録に残し、継続的に組織で支援をする。

不登校対策リーフレットを各学校で作成し、学校経営計画に盛り込みPDCAサイクルに基づき見直しを行いながら共通実践を図る。

(1) 小学校

長期欠席(30日以上)

	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
病気	0	0	2	0	0	0	2	2
経済	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	2	3	5	7	0	3	10	23
不登校	3	2	7	1	2	4	6	3

(R4は9月末現在)

- ・小4（女子）欠席45日 1～2回/週で登校 担任、SSW、村相談員管理職
- ・小5（男子）情緒欠席44日 1～2回/週で登校 保護者の方針改善傾向

(2) 中学校

長期欠席（30日以上）

	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
病気	1	2	2	3	0	0	7	4
経済	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	3	1	4	0	0	0	6	7
不登校	0	2	4	6	4	4	8	6

(R4は9月末現在)

- ・中1（男子）欠席64日（情緒、心因性）2学期始業式教室へ担任が1回/週で家庭訪問
- ・中3（女子）欠席46日 保健室登校、村教育相談員との面談
- ・中3（男子）情緒欠席60日 1～2回/週で登校 1時間程度学習

恩納村教育委員会においては、村雇用のSSWの存在が重要な位置づけになっているように思われます。また、担任、村相談員管理職についてもしっかりとサポートをしていることは、現在、いじめや不登校が増え続けている中であって恩納村教育委員会の取組が減少の参考になるのではと感じております。

石狩市議会石政会行政視察報告

日程 令和4年11月6日(日)～11月8日(火)

日時 令和4年11月7日(月)

場所 恩納村立うんな中学校(令2年4月開校)

出席者 石政会7名

恩納村 教育委員会 當山欽也 教育長

恩納村立うんな中学校 具志堅博昭 校長

合わせて7名の先生方の御出席を

いただきました。

この度の視察につきましては、いじめ、不登校「ゼロ」に向けての取組についてであります。

1. いじめ見逃し「ゼロ」に向けての取組について

- 学校は、全校集会において、校長が日常的にいじめの問題に触れ「いじめさゆるさない」風土を学校全体で醸成する。集会時に全児童、全生徒が一斉に「いじめの定義」を確認することで、いじめに対する認識の差を生まないようにつとめる。又「i-check」結果から見える課題に対して組織で対応するなどいじめと認知された事案は、全て緊急連絡第一報として教育委員会へ確実に報告する。

- いじめが否かの判断は、法令に基づき策定した基本方針に沿って、いじめ防止対策委員会で

行うことや弁護士会による「いじめ防止授業」等外部有識者の活用でその結果として令和3年はいじめ認知件数が小学校で6件のところ令和4年は9月末現在で2件にとどまっている。
 又中学校では、令和3年度で1件が4年では2件と思わぬ村教育委員会の取組が成果を上げているのではないかと感じています。

次に不登校「ゼロ」に向けた取組では当該児童生徒に関する情報収集とその整理を早期に行う。

村雇用SSW(スクールソーシャルワーカー)が個別のケースに日常的に関わり助言や必要に応じて家庭訪問に同行するなど登校支援に重要な役割を果たしている。又指導支援を確実に記録に残し、継続的に組織で支援をする。

不登校対策リーフレットを各学校で作成し、学校経営計画に登り込みPDCAサイクルに基づき見直しを行いながら共通実践を図る。

(1) 小学校 長期欠席(30日以上)

	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
病気	0	0	2	0	0	0	2	2
経済	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	2	3	5	7	0	3	10	23
不登校	3	2	7	1	2	4	6	3

(R4は9月末現) KYSKUTO

○ 小4(女子) 欠席45日 1~2回/週で登校担任SSW 村相談員管理職

○ 小5(男子) 情緒 欠席44日 1~2回/週で登校 保護者の方針改善傾向 KYSKUTO

(2) 中学校教

長期欠席(30日以上)

	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4
病気	1	2	2	3	0	0	7	4
経済	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	3	1	4	0	0	0	6	7
不登校	0	2	4	6	4	4	8	6

(R4は9月末現)

- 中1(男子)欠席64日(情緒・心因性)2学期始業式教室へ担任が1回/週を家庭訪問
- 中3(女子)欠席46日 保健室登校、村教育相談員との面談
- 中3(男子)情緒欠席60日 1~2回/週登校、時程度学習

思納村教育委員会においては、村雇用のSSWの存在が重要な位置づけになって

いるように思われます。又担任、村相談員管理職についても、しっかりとサポートをしていることは、現在のいじめや不登校が増え続けているなかにおいて思納村教育委員会の取組が減少の参考になるのではないかと感じております。

視察報告書

視察日時 令和4年11月7日
視察場所 国立研究開発法人 情報通信研究機構
沖縄電磁波技術センター

視察者

石政会 伊藤一治、花田和彦、加藤泰博、日下部勝義、高田静夫、佐藤俊浩、
山田敏人

視察内容

沖縄電磁波技術センターについて

所在地 沖縄県国頭郡恩納村字恩納 4484

沖縄電磁波技術センターの経緯について

1943年10月：那覇市に沖縄観測所を設置

1943年8月：沖縄観測所閉鎖(第二次大戦による)

1972年5月：沖縄の日本復帰に伴い北谷村の米軍瑞慶覧通信所内の電離層観測施設を
引き継ぐ形で沖縄電波観測所発足

1972年6月：電離層定常観測を開始

1976年3月：米軍瑞慶覧通信所返還に伴い施設の全面撤去

1976年4月：沖縄市に仮事務所開設

1976年12月：中城村に新庁舎完成・移転

1986年～：短波海洋レーダーの研究開発開始

1988年4月：「電波研究所」から「通信総合研究所」へ名称変更

1992年～：ウインドプロファイラの研究開発開始

1999年～：降雨レーダーの研究開発開始

2001年4月：「沖縄電波観測所」から「沖縄亜熱帯計測技術センター」へ名称変更

2001年3月：大宜味大気観測施設完成

2001年7月：石垣・与那国海洋観測施設完成

2001年8月：大宜味電波観測施設完成

2002年2月：恩納村、恩納通信所跡地に新庁舎完成、移転

2002年8月：名護降雨観測施設完成

2004年4月：情報通信研究機構へ再編

2011年4月：「沖縄電磁波技術センター」へ名称変更

2014年：一次元フェーズドアレイ気象レーダー完成

沖縄電磁波技術センターの主な施設はフェーズドアレイ気象レーダー、ドップラーライダー、光空間通信設備がある。

フェーズドアレイ気象レーダーは近年、局地的大雨(ゲリラ豪雨)や竜巻による突発的・局所的気象災害が大きな社会問題となっているため、これらの早期検知には、迅速な降水量の三次元構造の把握が重要であるが、従来のCバンド気象レーダー観測網や都市域に整備されているXバンドMPレーダーでは対応しきれていないのが現状である。従来のパラボラアンテナによるレーダーから発想を転換し、フェーズドアレイ方式を採用開発した。

フェーズドアレイ気象レーダーは、30秒間隔で隙間のない3次元降雨分布を100mの距離分解能で観測することが可能で、突発的な気象災害の監視や短時間予測に役立つことが期待されている。その観測データはNICTのWebページやスマホアプリ「3D雨雲ウォッチ」などで一般の方もリアルタイムで利用することができる。そこで雨の様子を3次元で捉えられると何がいかというと、上空の降水(雨、霰、雪など)の3次元構造を観測することで、大雨のメカニズム解明や10~20分程度の短時間予測が可能となる。また、ゲリラ豪雨の発生を予測することができるかについて、地上では突然に降ってくる印象があるが、実のところ、その豪雨の卵は10分以上前に上空で発生している。1分以内の短い間隔に3次元観測を行うことで比較的短時間の予測は可能になると考えている。テレビや一般の天気予報にも利用されるかについては、現在稼働しているフェーズドアレイ気象レーダーは、研究機関や大学などが実証実験として運用しており、気象庁などの現業機関が定常運用していない。そのため、現時点ではテレビなどの天気予報には使われていない。今すぐ全国各地に展開するのは難しいが、近い将来には現業レーダーとして利用できるよう関係省庁に働きかけている。

ドップラーライダーについて

ドップラーライダーは目に安全な近赤外のレーザー光を大気中に射出し、風によって流されている大気中の塵や微粒子(エアロゾル、例えば黄砂など)に反射されたレーザー光を受光し、リアルタイムに風光風速の空間分布を計測する装置である。

最大10kmまでの距離の風を観測することができる。コンテナ上部のスキャナーを走査して、任意の方向にレーザー光を射出・受光する。

光空間通信設備について

光空間通信設備は災害観測等を行う衛星や航空機からの大容量データ通信を想定しネットワークで接続された複数の可搬型光空間通信設備を整備する。

国内の民間企業の国際競争力を強化し、国内の小型衛星、外国の研究機関、航空機利用ユーザー等との連携による航空機による実証実験等の地上局として活用する。

最先端の技術を利用して気象の変化を短時間で予測することで災害を未然に防ぐことが期待される。電磁波研究所ということで電磁波が人体に与える影響の研究については沖縄電磁波技術センターではなく電磁波研究所の組織の電磁環境研究室で人体に対する高精度ばく露評価技術や省エネ機器等からの電磁妨害波の測定などを行なっている。

以上報告とする。

○斎場御嶽

所在地:沖縄県南城市知念久手堅539

所要時間:1時間20分

斎場御嶽の概要

15～16世紀の琉球王国、尚真王時代の御嶽

斎場(セーファー)は最高位を表し、御嶽とは琉球神道における祭祀などを行う施設で最高位の神祠を行う場所である。

特に琉球の最高神女(さいこうしんじょ)であった聞得大君(きこえおおきみ)の就任の儀式が執り行われ、国の豊穰を占う儀式も行われた、琉球王国最高の聖地です。

斎場御嶽は、数ある御嶽の中でも琉球王国最高の聖地として、王府が直接管理していました。その名称についてはいくつもの説がありますが、歴史的な文献には「さやはたけ」「サイハノ(タキ)」「さいは」などと記され、久高島とともにアマミキヨの五地として国王自らが巡拝(じゅんぱい)する習わしがありました。

斎場御の中にはイビと呼ばれる一域が6カ所あります。その中でも、大庫理(ウフグーイ)・寄満(ユインチ)はいずれも首里城内にある建物や部屋と同じ名前を持っていることから、両者の深い関わりを示すものと言われています。

また、斎場御嶽を説明するうえで欠かせないのは、琉球王国の最高神女・聞得大君の就任儀礼である「お新下り(おあらおり)」です。聞得大君は国の祭祀をまとめる重要な役割を担っており、王族の女性がその地位に就きます。首里城から出発し、南風原・与那原・佐敷を経由して斎場御嶽に着くまでの各地方の神役(かみやく)たちが参列する国の大きな行事でした。その主会場が斎場御嶽です。国の最高神職に就任する重要な儀式である「お新下り」の祭祀場として運ばれたことは、この御嶽の重要性を表しています。

また、斎場御嶽は2000年12月、「琉球王国のグスク及び関連産群」のひとつとして、世界遺産リストに登録されました。

主な施設は

- ① 大庫理(ウフグーイ)：最初の拝所で大広間や1番座という意味をもち、石段が一段上がっているのは屋敷に上がるのと同じイメージ。ここは祈りの場所です。
- ② 寄満(ユインチ)：ユインチとは王府の言葉で「台所」を意味しますが、ここでの意味としては「寄せては満ちる」の文字通り、当時貿易で栄えた琉球王国に寄せられ、満ちた交易品の品々が集まった場所とされています。石段は5段あり簡単にあがれる場所ではないことが伺えます。
- ③ アマダユルアシカヌビー・シキヨダユルアマガヌビー：アマダユルアシカヌビーは、首里城の王子(中城御殿)の水撫で(ウビナディー)、シキヨダユルアマガヌビーは聞得大君の水撫で(ウビナディー)に使われました。
- ④ 三庫理(サングーイ)・チョウノハナ：三角形の空間の突き当たり部分は、三庫理で右側の岩の上がチョウノハナで、それぞれ拝所となっています。

※引用:南城市観光ポータルサイト

【感想】

今回ガイドボランティアを利用しました。話し好きのガイドボランティアでなかなか前に進みませんでしたが、それがちょうど良い感じがしました。要点はしっかり話し、少し道に外れて戦時中に被弾した箇所の説明等あり良かったです。斎場御嶽としてはパワースポットとして有名で当日も多くの観光客が訪れていました。石狩市でも市内名所をもっとアピールして観光客が訪れる街としたいと思いました。

○平和記念公園

住 所：沖縄県糸満市摩文仁 614-1

所要時間：約 2 時間

・平和記念公園は...

戦没者を追悼するとともに平和を発信する公園として、沖縄戦終焉の地・糸満市摩文仁に整備された公園。約 40ha の広大な敷地には「平和の火」や「平和の礎」をはじめ、資料館や慰霊塔、墓苑が点在。

・沖縄戦...

日本が敗戦に向け、なし崩し的に戦局が悪化しているなかで、昭和 20 年（1945）3 月下旬から主に沖縄本島で起こった日本軍とアメリカ軍の戦いで約 90 日間におよぶ壮絶な戦いで、死者は住民を含み日米双方で 20 万人を超えました。日本における唯一の、住民を総動員した地上戦です。

・平和の火...

広大な園内の一番海側、多くの人々が身を投げたであろう海拔 50m の断崖絶壁の手前にあるのが、沖縄戦終結 50 周年となる節目の平成 7 年から灯り続けています。沖縄戦最初の米軍上陸地である慶良間諸島の阿嘉島で採取した火、原子爆弾が落とされた広島市の「平和の灯」、長崎市の「誓いの火」を合わせた火が、恒久平和を願い灯し続けられています。

・平和の礎...

「平和の火」を取り囲むように立ち並び平成 7 年（1995）に建設されました。国籍や軍人、民間人の区別なく、沖縄戦などで亡くなったすべての人々の氏名が刻まれています。24 万人以上におよぶ刻銘は検索コーナーで探すことができ、戦争で肉親を失った遺族や平和学習の団体など、多くの人々がその一人ひとりをお参りにすることが可能。

「沖縄県平和祈念資料館」は、沖縄戦に関するさまざまな資料を展示している、「平和祈念公園」の中心を成す施設のひとつです。沖縄の日本復帰から間もない昭和 50 年（1975）に開館した「沖縄県立平和祈念資料館」を前身とする資料館で、平成 12 年（2000）に開設されました。

1 階は子ども・プロセス展示室として、18 カ国 18 人の子どもたちの生活の様子を通して世界の多様性を学び、平和な未来を展望しています。

2 階の常設展示場は 5 つの展示室に分かれ、沖縄の人々の視点から見た沖縄戦の実相を後世に伝承。全世界の人々の心に、戦争の残酷さと平和の尊さを訴えています。

・第 1 展示室「沖縄戦への道」沖縄戦に至るまでの沖縄の歴史や、戦争がなぜ起こったかを解説。

・第 2 展示室「鉄の暴風」沖縄戦の実相を住民の視点から描き、被災状況を立体地図や

映像、実物などで展示

・第3展示室「地獄の戦場」沖縄戦で住民が受けた惨劇を、地下壕（ガマ）と地上（死の彷徨）で象徴的に伝える。

・第4展示室「証言」実際に沖縄戦を体験した住民たちから語り継がれる証言を集め、文字と映像で紹介。

・第5展示室「太平洋の要石（かなめいし）」戦後の収容所生活、27年間の米軍統治、復帰運動を経て、沖縄の教訓を発信しています。「沖縄県平和祈念資料館」には、悲惨な経験を生き延びた沖縄の人々の忌まわしい記憶が証言集として残っています。

【感想】

平和祈念資料館では70年以上前の戦争の記録が今も引き継がれていることは、とても大切なことだと感じました。戦争の悲惨さがとても伝わりました。現在ロシアによるウクライナ侵攻は戦争状態です。70年以上前のことが今も世界のどこかで行われていることが残念でなりません。世の中が平和で世界中の人々が安心して生活できる環境を一刻も早く取り戻してほしいと平和記念公園に来て改めて実感しました。

※視察先：ひめゆりの塔

○場 所：糸満市字伊原 671-1

○入館料：450 円

○ひめゆりの塔は

戦時中、沖縄師範学校と沖縄県立第一高等女学校に通っていた女学生や教師が負傷兵の治療にあたり、ひめゆり学徒隊と呼ばれました。その名にちなんだ慰霊碑がひめゆりの塔です。

ひめゆり学徒隊は、沖縄師範学校女子部と沖縄県立第一高等女学校の 15 歳から 19 歳の女子学生 222 名と教師 18 名が看護要員として、沖縄陸軍病院に動員されました。

負傷兵が増え続け、学徒たちは寝る間もないほど働き続け、看護だけでなく、食料の運搬や水くみ、死体の埋葬も彼女達の仕事でした。壕の外は砲弾が飛び交う戦場で、危険な環境の中仕事をしていました。

○感想

第二次世界大戦末期に、悲惨な地上戦が行われた沖縄。10 代の若いひめゆり学徒たちが、次第に戦争に巻き込まれ、看護要員として働かされ、多くの人が命を落としました。ひめゆりの塔とひめゆり平和祈念資料館は、その悲惨な歴史を後世に伝える貴重な場所となっています。戦争の体験がなくとも戦争を理解し、二度と戦争を起こしてはいけないという想いを強く感じました。

※旧海軍司令部壕

○場 所：豊美城市豊美城 236

○入館料：600 円

○旧海軍司令部壕は

沖縄は本土防衛最後の砦として、日本の中で唯一住民を巻き込んだ地上戦が行われた場所です。日本海軍沖縄方面部隊を指揮する「海軍司令部基地」として構築されたこの壕は、激しい戦闘の末、日本海軍が組織的戦闘の終焉を迎えた場所で、ほぼ当時のまま残されている貴重な施設となっています。

約 3,000 人の将兵が昼夜 5 ヶ月間かけ、手掘りで掘った跡、手榴弾で自決した弾痕跡、司令長官が壁に書き残した文字など、当時の戦況を今に伝える貴重な壕で、地下 20m の場所に 450m の長さがあります。現在整備・公開されているのはそのうちの 300m です。

○感想

壕に続く長い階段。下に進む程どんどん湿度が高くなっていき重苦しい雰囲気になっていきました。高湿度で感じたことのないような重苦しい雰囲気が漂う壕内はやや薄暗く、大人でも少々恐怖心を感じた。しかしこれまで様々な戦争遺構に訪れてきたが、ここの雰囲気は独特で、名状し難い強烈な印象を受けた。訪れたことのない人は是非ここに足を運び、自分の肌で感じてほしい。改めて戦争の愚かさや平和について考えさせられる素晴らしい施設である。